

特 集 1

とちぎ圏央まちづくり協議会「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム ～ L R T西側延伸で新たな価値あるまちづくり～

…… 要 綱 ……

1. 日 時 2025年5月13日(火) 14:30～17:00

2. 会 場 宇都宮共和大学 宇都宮シティキャンパス 401 大講義室

3. 次 第

(1) 基調講演「天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？」

宇都宮短期大学教授・「よみがえれ！宇都宮城」市民の会理事 江田 郁夫 氏

(2) パネルディスカッション

パネリスト

宇都宮市総合政策部(前東京サテライトオフィス所長) 馬場 将広 氏

宇都宮観光コンベンション協会常務理事 鈴木 孝美 氏

壬生町東京サテライトオフィス所長 落合 正浩 氏

壬生町歴史民俗資料館学芸員 藤栄友里絵 氏

(前 掲) 江田 郁夫 氏

司 会

宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長 須賀 英之

主 催 | 一般社団法人 とちぎ圏央まちづくり協議会

共 催 | 宇都宮まちづくり推進機構

■主催者挨拶

一般社団法人 とちぎ圏央まちづくり協議会 常務理事 新見 徹 氏



本シンポジウムの前に当協議会の定時総会を行いました。このまちもいよいよL R Tが西側に延伸し、東武宇都宮線に乗り入れるなど栃木県知事の力強い方針を受けて活動強化を図る協議を行いました。

本日は当協議会会員の他、「よみがえれ！宇都宮城」市民の会の皆さん、また行政を始めとする多くの地元の皆様方にお集まりいただき感謝申し上げます。

当協議会はL R T整備と共に8年前に発足し、沿線のまちの機能を

どのように創るのかを論議し提言をする役割で設立しました。

長年の皆様方のご尽力でL R T東側の活況は想定以上のもので、西側延伸を考えますと、より多くのお客様が世界中から栃木に来られます。

その中で栃木県は世界遺産日光を擁しております。

話は変わりますが、新幹線に乗ると半分位は外国人の方ですが、大半は宇都宮駅で降りず乗り換えだけです。

宇都宮市の魅力を更に磨き、世界遺産日光と連動する県央都市の役割を果たすためこのプロジェクトを進めて参りたいと考えます。

このプロジェクトのねらいは、今回作りましたお手元のパンフレットをご覧ください。

徳川時代の「江戸から日光」です。

大きなデザインですが、日光街道、例幣使街道、沿線街道沿いのリソースを拾い起し、新たにどのようなまちづくりをすべきか、今回は県央の宇都宮市や壬生町を中心に論議するキックオフ会議です。

次回からは、江戸から宇都宮市、日光市に繋ぐ沿線の小山市、栃木市、壬生町、鹿沼市、日光市などの自治体も交えながら進めたいと思います。

さて本プロジェクトを進めるにあたってのキーワードは「連携」です。

関係自治体間の連携、交通事業者、旅行会社等、栃木全县に関わる方の連携が不可欠です。

また当会員もグローバル企業が増加しています。日々のビジネスネットワークを活用し栃木のブランドアップに、即貢献が可能と思います。

私事ですが、私が栃木県、宇都宮市と出会って30年を超えました。とりわけ宇都宮市の変貌ぶりはL R T整備により今後「全国ナンバーワンの都市」になれると確信します。

また栃木県も大きなポテンシャルを持っています。

世界遺産日光と徳川時代の「とちぎSHOGUN物語」のように、世界的に通用するプロジェクトを行うことが重要と考えます。

最後に、ブランドの話をしします。

人口減下、ブランド力の無い企業は発展しません。

都市も同じだと思えます。

この宇都宮市を引っ張ってきたブランドが二つあります。一つ目は餃子で、これはナンバーワンです。二つ目はL R Tで、最強の武器です。

三つ目の武器は「とちぎSHOGUN物語」になるよう取り組んでいきます。

栃木が持つ世界遺産の活かし方をこのプロジェクトで訴求していきたいと思えます。

本シンポジウムにあたり、宇都宮共和大学の須賀学長にはプロジェクトの発足からシンポジウムの開催までご指導を頂き感謝に堪えません。

これからの更なるご指導とご支援をお願い申し上げ挨拶とさせていただきます。

基調講演

「天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？」

宇都宮短期大学教授・「よみがえれ！宇都宮城」市民の会理事

江田 郁夫 氏



ただいまご紹介いただいた宇都宮短期大学の江田です。よろしくお願いします。

とちぎ SHOGUN 物語というシンポの基調講演ということですが、SHOGUN が横文字なのは斬新で面白いと思いました。それは多分、皆さんもよくご存知かと思いますが、昨年アメリカで放映されたドラマシリーズの「SHOGUN 将軍」にあやかってこのような横文字に、まあインバウンドということ

ともあるのですが、ご承知のとおり真田広之さんが演じました。役名は吉井虎永とのことですが、徳川家康になぞらえた役柄ということで、昨年からエミー賞やゴールデングローブ賞などの賞を総なめにしました。そのような「SHOGUN 将軍」ですが、その将軍がこの栃木県の日光に葬られたということです。

1999 年から世界遺産なので、すでに 25 年がたっています。ですが世界遺産になる前から、「日光を見ずして結構と言うなかれ」という格言がありました。これはただの語呂合わせかと思ったら、辞書などを引くと、ナポリを見て死ねとほぼ同義ということで、イタリアのナポリも世界遺産ですが、それと並ぶようにして日光がありました。具体的には、東照宮に代表される名建築の数々が注目されています。結構調べてみると、江戸時代後期ぐらいまでさかのぼっています。ですから、日本国内ではすでに日光はそれほどのネームバリューです。江戸時代、伊勢神宮詣でが爆発的な人気を博したことはご承知かと思いますが、もう 1 つ人口に膾炙したのが日光でした。

とちぎ SHOGUN 物語のこのパンフレットは、先ほどもご紹介があったと思うんですけども、よくできていると思います。栃木県立博物館に収蔵される名品の数々が写真になっていて、表紙は江戸時代前期に描かれた東照宮です。ですから、日光の山内と呼ばれていた世界遺産になった地区の、それこそ今から 400 年前当時の姿、できたてほやほやの頃の日光の様子が描かれています。そして裏側の写真は、よくご存知の徳川家康、東照大権現だいごんげんです。その下は、これもよくできていると思うのですが、山内の入り口の神橋が描かれています。また道々の宿場の情景などもあ

ります。昨年の夏の甲子園大会で注目された石橋高校がある石橋宿の様子も、宇都宮の入り口の様子もあるということで、まさに江戸時代の^{しもつけ}下野の光景が描かれています。

今回の基調講演は2つの話を軸にしたいと思います。1つは、もう皆さんはよくご存知だと思いますが、そもそも「日光を見ずして」と人口に膾炙した日光とはどのような場所なのか、それがまず前半のお話です。それから後半は、せっかくここ宇都宮で開かれたシンポなので、その中で宇都宮はどのような役割を担っていたのか、この点をご紹介しますと思います。

この後具体的な話は、お手元のレジュメを一応ご確認いただきたいのですが、1ページと2ページが私の話の主な内容です。それから地図がその後に2つ付いています。3ページ目の地図は、きょうの題名は天下人とあります。天下人とくれば徳川家康もそうですが、その前に豊臣秀吉がここ宇都宮を訪れたというのが3ページの地図です。

1590年、天正18年に豊臣秀吉は小田原の北条氏を滅ぼして、その後天下統一を実現します。戦国が終わって、関東、東北にも平和な時代が訪れます。その際に秀吉は、小田原から宇都宮、会津までを訪れます。その旅程図が3ページ目です。ですから家康が葬られる前にまず秀吉が宇都宮に来ていて、延べ11日間滞在しました。後でお話ししますが、その際に家康も宇都宮に来ていますし、伊達政宗なども宇都宮にはせ参じました。ただ政宗は小田原に遅参しただけでなく、実は宇都宮にも2日ほど遅参してしまったのですが、そのような具合で、宇都宮が重要な歴史上の舞台になっていました。

ただ皆さんに注目してほしいのは、後に五街道といわれる中で、例えば日光道中や奥州道中、先ほどご紹介したパンフレットにも、それらの江戸時代の街道の様子が紹介されています。実はレジュメの3ページ目の地図を見ていただくと、原奥州街道と呼べるものを通して、秀吉は多くの軍勢と共に宇都宮、そして会津まで訪れているわけです。すでに家康以前、江戸時代以前から宇都宮はそのような交通の要所でした。

これも後で詳しくお話ししたいと思います。家康が日光に葬られたのち、歴代将軍が家康の命日に日光に参詣します。これを日光社参と呼んでいますが、その際には江戸を出た後、岩槻に1泊して、古河に1泊、宇都宮に1泊、そして日光に2泊して帰ります。同じ道を帰る場合もありましたが、きょうはまた別に壬生の方がいらしているので、あらためてご紹介いただけたと思いますけれども、壬生にも泊まる機会がありました。そのような交通ルートを使って日光社参は行われました。

それ以前に秀吉も、3ページ目ですが、小田原ののち鎌倉に行って、鶴岡八幡宮^{つるがおかはちまんぐう}に詣でて、その後江戸で家康と打ち合わせをして、岩槻に行きました。つづいて結城^{ゆうき}に泊まって、その後宇都宮に8泊9日して、東北地方へと向かいました。地図ではブルーになっている線が会津からの帰り道です。その頃宇都宮から東北に行くには2ルートあって、その2ルートを秀吉は、行きは白河経由、帰りは南会津と鬼怒川^{きぬがわ}経由で宇都宮に戻ってきました。家康以前から、そのような街道筋の分岐点に宇都宮は位置していました。ですからこれは、まさに宇都宮が東北への玄関口だったことが分かる地図です。

4ページ目ですが、江戸時代にはこのような街道筋が縦横に、ご承知のとおり栃木は海なし県

なので、またそれと同時に河川交通も重要な意味を持っていました。ですがやはり陸上交通路の持つ意味が大きかったということで、地図にあるとおり、宇都宮から東北に向かう奥州道中、日光に向かう日光道中があります。徳川秀忠が日光からの帰り道に泊まった壬生は、日光道中壬生通りです。

同じく、朝廷から派遣された使節がはるばる日光にやってくる時は、足利、栃木、そして鹿沼を経る例幣使街道です。その使節を例幣使と呼んでいたのが、例幣使街道と呼んでいます。以上のような街道がまさに栃木県を縦横に走っていたこととなります。

そのような中で、そのつながりのキーポイントが日光です。それから宇都宮も同様に重要な場所だったということ、この後具体的にご紹介したいと思います。

ではレジュメの1ページから順番にご説明をさせてください。まず1ページですが、はじめに書いておきました。なぜ家康が日光にということですが、そもそも東照宮はどのような役割を担っていたのかということで、写真をいくつかお見せしたいと思います。ご覧いただいている東照宮に葬られたのが家康です。家康が亡くなった時にはもう大御所で、将軍は秀忠に譲っていたので、駿府、現在の静岡市で亡くなっています。彼はまずは久能山に葬られました。それがその後遺言によって日光に葬られます。

日光はもともと自然豊かな場所ですが、宗教的に日光を本格的な霊場、聖地として開いたのは、芳賀地域出身といわれる勝道りんのうじという僧侶です。これは日光の輪王寺境内にある勝道の像です。そして、ご神体とされた男体山と中禅寺湖です。山岳信仰の霊場として、日光はこの後長い間信仰の対象となりました。つぎが世界遺産である山内の入り口の神橋です。

山内に入った後、特に日光の特徴として、山岳信仰と結び付いているので、山岳信仰の神が現われた神社として本宮があります。勝道上人が開いた四本龍寺というお寺のすぐ隣にあるのが本宮です。そして宇都宮にも二荒山神社ふたあらかやまがありますが、日光の二荒山神社ふたらさんは新宮と呼ばれていました。そしてもう1つが、山内の奥にある滝尾社です。これらが日光を形づくる重要なポイントとなる神社ですので、それらも含めて日光の歴史を少しご紹介します。

ではレジュメです。はじめにというところです。天下人、家康が亡くなるわけですが、彼は三河国、現在の愛知県岡崎市生まれで、最後の鷹狩り中、1616年、すでに駿府城に移ってからのことです。ご承知かと思いますが、結構彼は薬に詳しいし、特に健康にも気遣っていたということで、趣味でもありますが、健康管理も含めて鷹狩りをよくしていました。ですが1616年1月21日に体調を崩して、田中城というところで発病して、その後自分の居城である駿府城に戻り、4月17日の午前10時ごろに、数え年で75歳の生涯を終えます。ですから命日の4月17日が、この後将軍たちが日光に参詣する日光社参の日になりました。

そして家康は、死を間近にしてつぎのような遺言をしたといわれています。遺言の場に立ち会ったのは、後に宇都宮藩主となって現在の宇都宮の町場の原型をつくり上げた人物です。家康の側近中の側近の本多正純です。それから、同じく家康の信頼が厚い南光坊天海です。もともと会津出身ですが、生年がはっきりしないので、大体の辞書だと102歳や108歳で亡くなったといわれています。私の知っている限り132歳というのもありましたが、132歳は置いといて、ただそれ

ほどの長命でした。1643年に亡くなったのが天海です。

のこるもう1人、臨濟宗、京都南禅寺の住職などを経て、幕府の寺社行政に携わったのが金地院崇伝です。その崇伝が書き残した日記に、家康の遺言はこのように現われてきます。アンダーラインを引いておきましたが、②です。家康が言うには、1、まず御体を久能山に納めてください。2、葬式は東京都にある増上寺にて申し付けます。3、御位牌をば三河の大樹寺にといいことです。出身地ですし、もともと家康は松平なので、松平氏の菩提寺の大樹寺とということでした。そしてその後が日光です。4、「一周忌も過ぎ候て以後、日光山に小き堂をたて、勸請し候へ」。臨終に当たって、彼自身が日光へ、それも一周忌というタイミングまで具体的に指定していました。なぜ日光かといったら、レジュメの矢印です。日光に葬ることによって「関八州の鎮守とならん」。関東、当然江戸も含めてでしょうけれども、それを私が守るといふうなことを言いました。

その後の展開は、秀吉は豊国大明神となりましたが、家康のほうは東照大権現という神号を授与されました。これは1617年2月21日で、亡くなった翌年のことです。息子の秀忠がまずは早速、日光東照社を建立しました。そしておじいちゃん好きの、家康の孫である3代家光が、家康の21回忌を期して国家的なプロジェクトを行いました。これを寛永の大造替と呼んでいます。1636年に現在の東照宮を造り上げました。東照宮と呼ばれるようになったのは、朝廷から宮号許可が、つまり伊勢神宮もそうですが、それまで東照社だったものが東照宮に格上げされたということで、1645年から東照宮になりました。

以後の東照宮の役割はレジュメに列記しておいたとおり、徳川将軍家が家康の命日4月17日を期して日光に参詣します。これに付き従う部下たちがどのくらいかは、いろいろなケースがあったようですが、それこそ10万人程度という大軍勢だったということです。現役の将軍ではない場合も含めて、おおむね全19回というのが一般的です。

それから先ほど例幣使街道をご紹介しましたが、朝廷からの使節を例幣使と呼びます。これも毎年派遣されます。そして特に国外から、具体的には朝鮮からやってきた朝鮮通信使という外国使節や、琉球の使節も時にはこの日光に社参しました。ですから、家康の遺言はあくまでも関八州の鎮守ということでしたが、実際には日本の総鎮守という役割を担っていました。※印で書いておいたとおり、一時は全国に700社程度東照宮があり、一番北では函館にあったようです。

ただし問題は、なぜ家康が日光に葬られたのかです。彼自身は一度も日光を訪れていません。諸説あるのですが、差し当たりまずは、では日光という場所は？ということです。これも皆さんはよくご存知かと思うのですが、さらっと徳川家康以前の日光はどのようなところだったかを確認しておきたいと思います。

そもそも日光とはということで、レジュメ1番の①です。日光山というのはある意味当て字で、もともとは二荒山です。二荒山は音読みなので、訓読みでは二荒山です。なぜ二荒山かといえば、これも諸説あるのですが、多分これが一番かと思うのは、補陀洛山です。観音の住みか南海の彼方にあると信じられた山が、もともとの二荒山の起こりで、それが現在の日光になったようです。

先ほど写真でご覧に入れた芳賀郡出身の勝道が、776年といますから、今から1200年以上

前に、日光山内に千手観音をまつる四本龍寺を創建しました。これが現在の輪王寺につながるのですが、写真でご覧に入れた本宮神社のある辺りが、そもそものお寺のスタート地点ということで、四本龍寺が創建されました。その後782年に二荒山、今の男体山に登頂しました。そしてこれも先ほどご覧に入れた中禅寺湖畔に、その神をまつる神宮寺を造りました。ですからそもそもが山岳信仰と結び付いていた霊場でした。

②です。日光山の特徴は神仏習合です。本来日本では、さまざまところに神が宿るという信仰を基本としていましたが、世界宗教である仏教が入ってくるとともに、大変日本は柔軟なので、神と仏は一体です。その際に、世界宗教ですので、もともとの大本は仏さまで、それを本地仏と言いますが、それが日本では神の姿でも現われます。これを垂迹すいじやくと言います。ですから本地垂迹説などと呼ばれるのですが、そのような神仏習合の考えが日本では広まっていきました。

日光も神仏習合の霊場ですが、特に京都の天皇や、天皇をやめた上皇・院が、平安時代に苦勞して訪れた世界遺産があります。②に書いてある熊野三山です。熊野三山の場合は本宮、新宮、それからあの有名な那智の滝がある那智社です。その熊野三山信仰が有名ですし、参詣道である熊野古道も世界遺産となっています。同じように日光でも、三所権現信仰と呼ばれる信仰が一般に広まっていきました。

その際の山がご覧いただいている男体山と、それと並ぶ女峰山、太郎山です。そしてその本地仏は千手観音と阿弥陀如来、馬頭観音でした。先ほどご覧いただいたように、それらが現われた神社が本宮と、それから東照宮のすぐ隣にある新宮——現二荒山神社と、その奥にある滝尾神社です。ですからまさに1,300年来の霊場が日光であって、そこに家康がまつられました。

家康以前にも日光を厚く信仰した武将は確かにいます。③と書いておきましたが、例えば源頼朝も日光山を崇敬していました。実は頼朝以前、父の義朝も日光山と関わりを持っていて、日光山の堂舎——建物を造営したことによって、現在の栃木県知事のような下野守しもつけのかみに任じられていました。そんないきさつがあるので、レジュメの2ページですが、頼朝本人も日光山に土地を寄進していました。

その土地が特徴的なのですが、三昧田と呼ばれる土地を寄進しました。三昧田というのは、常行堂というお堂で、念仏三昧という祈祷を行うに当たって、常行堂を含めた維持管理費用のための田んぼを15町ほど寄進しました。その点でも、頼朝は日光山が何たるかをよく知っていました。以上のような経緯から日光山は、その後の武家政権、鎌倉幕府、室町幕府でも大変重要視された霊場でした。

例えば鎌倉には、現在は残っていませんが、頼朝のお父さんである義朝の菩提寺として頼朝が創建した、勝長寿院があります。そこの最高責任者が別当なのですが、勝長寿院というお寺の別当は、実は日光山の別当、長官も兼ねていました。この日光山別当には後に天海も就任しました。そのように大変歴史のある重要なポストなのですが、鎌倉の僧侶が日光山別当に就任します。その点からもうかがえるように、鎌倉幕府、その後の室町幕府のもとでも日光山との緊密な関係が長く続いたというのが、日光山の特徴の一つです。

④と書いておきましたが、日光山は実は関東の霊場というだけではなくて、このようにも言わ

れていました。関左の^{ひえいざん}比叡山です。関左は関東地方を意味します。つまり、京都の王朝を守護する比叡山と並ぶ重要なお寺が関東の日光山であると、古くから言われていたということです。

比叡山は皆さんもよくご存知かと思います。比叡山の場合も古くから山岳信仰の対象で、最澄によって天台宗の根本道場となり、延暦という元号まで付けられた重要寺院である延暦寺が開かれました。先ほど出てきた三昧というのは、実はこの比叡山に始まる、常行三昧堂というお堂があります。そのお堂は、ここ栃木県出身の円仁という、中国まで渡った僧侶がもたらした祈禱^{きとう}でありお堂です。ですから、中国の五台山で見て学んで、その上で比叡山に円仁が建てたのが常行三昧堂という、阿弥陀さまを本尊として常行三昧という祈禱をする、重要なお堂です。そのような関係で、早くも1145年に日光山にも建立されて、以後重要な法会が行われました。

例えば、修正会というのは正月に行う祈祷です。国家の安泰や五穀豊穰を祈りますが、その修正会や大念仏会が行われました。その点からも分かります、比叡山という日本を代表する寺院と並んで、関東の天台系寺院の中心的な存在となったのが日光山です。それを象徴する表現が関左の比叡山でした。

関左の比叡山は、江戸時代になると東京上野の寛永寺が担うことになります。上野の寛永寺は江戸時代になると東叡山寛永寺と号して、関東の総本山になります。それまでの流れと同じように、寛永寺の住職は、天台座主という天台宗のトップと、日光の門主を兼ねます。以上のように比叡山との関わりは古くから連綿とつながっていきます。その立場を輪王寺宮門跡と呼んでいます。

というわけで、前半お話ししたのは日光山の歴史です。申し上げたように、日光山は家康以前にもそれこそ長い歴史を持っていて、各時代の武家政権と密接なつながりを持っていました。それを象徴する表現の一つが関左の比叡山という言い方だったわけです。では一方で宇都宮はどうかということ、後半ではお話ししたいと思います。

レジュメ2ページ目の2番ですが、「天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？」です。織田信長は天下人になる途中で亡くなるので、天下人という表現は大体的に豊臣秀吉、それから徳川家康、戦国の世を治め天下を統一したふたりの人物がいわゆる天下人となります。まずは豊臣秀吉と宇都宮という話をします。先ほども簡単にお話ししたところですが、3ページ目の地図をご覧くださいながらご説明します。

秀吉は非業の死を遂げた信長の後継者となった後、まずは四国、九州を平定します。その後いよいよ東日本を制圧ということ、その際に惣無事令という、高校の教科書にも紹介された、秀吉の平和令と呼ばれるものがありました。ただ現状の理解では法令として出されたわけではなくて、勝手な戦いはするな、私戦、個人的な戦いをやめろという命令を秀吉は各地に下しています。

小田原城の北条氏はそれに違反して、最終的に秀吉から攻められます。小田原評定^{ひょうじょう}といわれるとおり、結局北条氏は籠城戦を選択して、1590年4月から籠城戦が本格化し、7月上旬には落城してしまいます。約3カ月の籠城戦になったわけです。しかしそれで北条氏が滅びたからといって、天下統一が実現するわけではなく、その後の関東・東北地方における天下統一の総仕上げが必要になってきます。そのために秀吉は、まず小田原城の近く、箱根山麓に一夜城という見

事な城を築き上げて、そこで籠城戦を督戦しました。

つづいて鎌倉鶴岡八幡宮に参詣して、白旗神社という源頼朝をまつた神社に詣でて、頼朝像を見ながら、確かにあなたは天下を統一したけれども、私のほうがもっと偉いです、私には部下もない中で天下統一を実現したなどと話しかけたと、後世に言い伝えられています。

その後が江戸、そして岩槻です。これは地図でご覧いただければと思いますが、そのあと結城に行きました。結城は寄り道になります。本来なら古河、小山から直接宇都宮へ向かって構わなかったわけですが、秀吉は家康からの養子、実際には人質として家康の息子を預かっていたので、その処遇の関係で結城に立ち寄っています。ご存知のとおり、家康の次男は結城家の跡取りとなりました。その件はこの段階で決まったと思うのですが、結城秀康となって、小山一族の結城氏を継ぐ形になります。そのような関係で取りあえず結城に立ち寄りました。そして宇都宮には7月26日に到着しています。

本来なら伊達政宗は、秀吉の宇都宮到着時には出迎えるべきだったのですが、いません。翌々日の朝10時ぐらいに遅刻して来ます。そのような経緯で、その後秀吉は伊達政宗に会います。そして7月29日には、今度は家康が宇都宮に来て秀吉に面会します。その際に、息子の秀康を結城氏の養子にすることや、例えば家康家臣の井伊は群馬の箕輪城主にしようなどという、細かな指示をして、その後8月4日まで、これは天気が悪かったこともあるようですが、延べ9日間宇都宮に滞在しました。

8月4日は大田原に2泊して、翌日が白河泊まりです。続いて長沼、つぎに中地、そして会津に到着します。会津では蒲生氏郷という、織田信長にも使えた名将が会津城主に抜擢されます。最終的にここ宇都宮に、蒲生氏郷の息子の秀行が宇都宮氏が滅びた後にやってきますが、もともと蒲生氏は会津に配置されました。そのような仕置を終えて、帰りは、今は国道121号線、かつては会津西街道と呼ばれた道が通っている会津田島、それから藤原という鬼怒川温泉あたりを通過して、宇都宮に戻りました。秀吉は帰り道は急ぎ足で古河、岩槻を通ります。その後はもう江戸に立ち寄る必要がないので、小田原に直行する途中で府中競馬場のある府中に泊まって、小田原までということでした。

以上のようにここ宇都宮は天下統一の総仕上げを行った場所です。そのような戦後処理を仕置と呼んでおり、宇都宮・会津仕置という、戦国時代を終わらせる舞台になったのが宇都宮でした。

なぜ秀吉にとって宇都宮仕置だったのでしょうか。途中いろいろ紆余曲もあったようですが、秀吉に仕えた五奉行の1人に増田長盛という奉行人がいます。彼の手紙によると、「秀吉様は会津まで取りあえず行く予定です。なので道の整備をしてください」とあります。ただし、「会津はもしかしたら行かないかもしれないけれども、宇都宮までは必ず行くから」とも述べています。結局、秀吉は会津まで行きましたが、宇都宮には必ず行くと当初から言っていたわけです。

なぜそれほど秀吉は宇都宮にこだわったかということ、やはり宇都宮二荒山神社、かつての宇都宮大明神ということになるかと思います。それこそ宇都宮大明神はただの神社ではありませんでした。レジュメの②に書いたとおり、実は宇都宮大明神、現二荒山神社には、以下にお示しする超有名人、ビッグネームが戦勝祈願をしました。その典拠となる宇都宮大明神の神官が室町時

代にまとめた、本社はこんなに由緒正しく、多くの人々の信仰を集めた神社ですという由緒書（「宇都宮大明神代々奇瑞之事」）によると、少し眉つばだと思うのが1番です。まず藤原秀郷が宇都宮大明神に戦勝祈願をし、平将門をうち滅ぼしました。いわゆる承平天慶の乱です。朝廷を大混乱に陥れ入れました。平将門はここ関八州をほぼ統一して、天皇に代わって新皇と号したという事件です。その際に秀郷が将門を討つに当たって、宇都宮大明神に戦勝祈願をしました。

そしてその後も、2番源義家が現在の岩手県辺りに勢力を持っていた安倍一族の安倍貞任を討ちました。これは前九年合戦と呼ばれる合戦ですが、その時にも源義家が戦勝祈願をしたと伝承されています。

そしてこれは歴史的な事実で、3番の源頼朝です。源頼朝は日光山に三昧田を寄進しただけでなく、宇都宮大明神にも実際に詣でています。レジュメでは②の3と書きましたが、平氏を滅ぼすことによって源頼朝は全国を軍事力で従えたわけではなく、頼朝にとって目の上のたんこぶが、まだ平泉を中心に東北地方に残っていて、こともあろうに弟の義経までそこに逃げ込んでいるという問題を抱えていました。その平泉の奥州藤原氏を最終的には朝廷の許しを得ずに討ってしまう、これが奥州合戦で1189年のことです。

1189年、あの秀吉と同じように7月17日に鎌倉を出発した頼朝は、7月25日に宇都宮に到着します。着いた頼朝は何をしたかという、さっそく宇都宮大明神に詣でて戦勝祈願をし、それと同時に上矢を奉納しました。その上でようやく宇都宮氏の館に入って宴会を開きました。

宇都宮は当然奥州に向かう順路なのですが、頼朝が宇都宮で行ったことは宇都宮大明神に詣での戦勝祈願でした。この後頼朝は奥州藤原氏をぶじ滅ぼして、東北地方から帰ってくるわけですが、10月19日に宇都宮に着いたあと、再び宇都宮大明神にお礼参りをしています。一応祈った以上、願いがかなったらきちんとお礼参りをするというのが本来の作法なので、頼朝は帰り道に宇都宮大明神に詣でて、お礼に荘園等を寄進したわけです。

そして4番です。その後、こちらは確たる史料には出てきませんが、モンゴル軍がやってきた文永・弘安の役でも戦勝祈願がなされたとのこと。

ではなぜそのように、歴史上の有名人がそろいもそろって宇都宮大明神に戦勝祈願をしたのかということ、実は日光三所権現のうちの太郎権現が、宇都宮大明神に移されている、勧請されているということです。レジュメの矢印に書いたとおり、宇都宮大明神は日光山の里宮、別宮という位置付けを与えられていました。これは意図的にそのようにしたところがあると思います。

かつての宇都宮大明神の参道にはたくさんの鳥居が立っていました。なかでも一の鳥居は最初の鳥居ですが、これは本来宇都宮の入り口にあたります。その宇都宮の入り口にあった一の鳥居にはどのような神額が掛かっていたのかということ、まずは正一位勲一等という神様の位階とともに、日光山大明神の名前が記されていました。つまり、宇都宮は日光山の入り口であり、その里宮が宇都宮大明神という位置付けです。それを宇都宮大明神の神官がきちんと記録していたわけです。

似たような話が鹿沼にもあります。鹿沼の町場への入り口で、今鳥居跡と呼ばれているところには、源頼朝が造ったという鳥居がかつてありました。聖地日光山への入り口として、それぞれ

宇都宮と鹿沼に日光山への最初の鳥居があったということになります。最近「ブラタモリ」を見ていて、伊勢神宮に詣でる時に、同じように伊勢神宮の鳥居が、何と伊勢神宮から70キロ手前の桑名にあるということを知って、初めてふに落ちたところがあります。そのようなシンボリックな町であり神社が、この宇都宮大明神になろうかと思えます。

そろそろ時間のようですので、おわりにに移ります。では家康はということです。きょうお話ししたのは、まず前半では、日光山は家康以前、どのような位置付けを持った霊場だったかということでした。後半お話ししたのは、一方の宇都宮はどのような場所かということで、それぞれ天下取りを狙うような武将たちにとっての聖地でした。

それには理由があって、特に秀吉は源頼朝を強く意識していました。自分が戦いに勝った時には、彼はパフォーマーなのでいろいろと宣伝をするわけです。例えば柴田勝家を破った賤ヶ岳しずがたけの戦いの時には、自分の大勝利は頼朝以来ですなどと。頼朝以来の大勝利を自分はやったなどと周りには言うわけです。頼朝の事績には詳しい秀吉ですので、宇都宮大明神は頼朝が詣でて東北地方を治めた由緒正しい神社なので、会津に行く予定だけれども、宇都宮までは必ずと秀吉が言ったのは、やはり宇都宮への執着、そして宇都宮が武将たちにとっての聖地としての位置付けがそうさせたところがあると思えます。

ただ残念なのは、7月25日に頼朝は宇都宮に到着しましたが、秀吉は7月25日には結城に行っていて、翌26日に来ています。これも頼朝を尊重して1日遅れで来たのであればいいのですが、日にちには1日のずれがあります。ですが、頼朝から実に401年ぶりに天下人が宇都宮にやってきて、当然宇都宮大明神にも詣でたのだと思います。

そのような秀吉に対して、家康です。家康は、宇都宮までは確かに来ています。その宇都宮来訪ですが、家康の宇都宮デビューは、秀吉に呼びつけられてやって来た1590年7月29日です。先述したように宇都宮城で秀吉と会談して、養子問題では秀康を結城氏の養子にするのは問題ないことや、家康の領国支配についても、北条氏の領域をほぼ彼が引き継いでいるので、重臣クラスの配置場所について秀吉の指示を受けています。

その後、家康は江戸に戻ります。ちょうど8月1日に江戸に戻ったということで、江戸開府は8月1日とされています。それ以前から家康は江戸に滞在していたのですが、この八朔——8月1日の江戸打ち入りが、のちのちまで江戸のスタート地点に位置付けられます。

秀吉の宇都宮・会津仕置ののち、残念ながら東北地方は秀吉の思惑どおりには治まらず、さっそく反乱が起こります。その反乱鎮圧に奔走したのが、秀吉のおい秀次と家康でした。彼ら2人が鎮圧軍の総大将になります。そんな関係で家康は今の宮城県北部まで実際に下向しています。家康が東北に向かったのが7月下旬ごろ、また反乱を鎮圧して東北から戻ったのが10月下旬ごろです。その往復時にも当然宇都宮に宿泊したことでしょう。

そして最終的に家康にとってキーポイントになるのが、1600年の関ヶ原合戦でした。その関ヶ原合戦の前哨戦として、まずは上杉景勝攻め。ちなみに、400年以上にわたってここ宇都宮を治めていた宇都宮氏という大名、宇都宮国綱という武将が秀吉によって改易にされた後、蒲生氏郷の息子秀行が宇都宮にやって来ます。18万石と、ほぼ土佐一国に当たる領地が当時の宇都宮領だっ

たわけで、蒲生秀行が宇都宮領を引き継ぎました。蒲生氏はもともと近江日野出身ですので、蒲生氏が城下町を営んだところには日野商人が移り住んでいます。それが日野町で、宇都宮にも会津にも日野町が形成されました。したがって、宇都宮は蒲生氏ともつながりが深いわけです。

話を戻しますと、蒲生氏郷が亡くなった後、息子の秀行では会津 100 万石は治められないということで、あらたに上杉景勝が抜擢されます。その上杉がどうやら家康に敵対しようとしているらしいということで、1600 年に会津討伐がまず計画されました。その際の前線基地が宇都宮城です。宇都宮城には徳川秀忠が江戸からやってきますし、結城秀康も来ています。家康の息子たち 2 人がそろって宇都宮城を本営にしています。会津の上杉景勝を攻めるには、やはり宇都宮が重要だったということです。

すでにご覧いただいたとおり会津攻めには 2 ルートがあって、そのパターンは幕末の戊辰戦争でも繰り返されます。具体的には本営の宇都宮から白河経由で会津に向かう東ルートと、南会津を経由する西ルートを使うことがこの時にも予定されていました。

総大将である家康本人も宇都宮に向かっていたわけですが、石田三成の挙兵を聞いて宇都宮に行く途中の小山で評定を開催することになります（小山評定）。そして、小山評定後に家康は西上します。ただし、私的には家康が宇都宮まで来た可能性も十分に考えられると思っています。この点は確たる記録には残されていませんが、何せ宇都宮は武将たちの聖地です。くわえて家康には小山に滞在したことになっている空白の数日間があります。そのうえ、つぎにご紹介するような証拠が宇都宮二荒山神社の本殿に残されています。本殿の擬宝珠^{ぎぼし} 4 本に刻まれた銘文です。

宇都宮に歴史的な建造物が残っていないのは、戊辰戦争と宇都宮大空襲のせいだとよく言われます。実はそれだけではありません。1585 年、天正 13 年にも北条氏直によって宇都宮が焼き討ちされました。その際に宇都宮大明神と周辺は北条氏の手で特に念入りに焼き払われてしまいました。ですから、家康が何度か宇都宮を訪れた時には宇都宮大明神の社殿はまだ仮殿の状態でした。それを家康が 1605 年に再建してくれたのです。

家康の手で新造された宇都宮大明神の本殿には、それを記念する擬宝珠が付けられました。その擬宝珠には「下野国河内郡宇都宮大明神御建立 征夷大將軍源家康」と刻まれています。ところが、銘文が刻まれた 1605 年 7 月の時点での征夷大將軍は正確には秀忠で、すでに同年 4 月に家康は將軍を辞任して秀忠に將軍職を譲っていました。にもかかわらず、擬宝珠の銘文には「前」や「元」征夷大將軍の文字はありません。これはいったいどういうことでしょうか？

察しのよい皆さんならおわかりのことと思います。征夷大將軍の地位は宇都宮大明神のご利益で実現したものである以上、そのお礼として新造された本殿の擬宝珠には「征夷大將軍源家康」と刻銘するのが当たり前で、そこに「前」や「元」の文字は不要だった、ということではないでしょうか。

つまり、小山評定の後、家康本人はお忍びで宇都宮を訪れて以後の作戦計画を配下の武将たちと協議する一方で、靈験あらたかな宇都宮大明神に戦勝祈願を行った。その後、家康は関が原合戦に勝利して天下人の地位を確立。そのお礼として、家康は宇都宮大明神の社殿を再建したほか、大明神領として 1,500 石もの所領を寄進しています。この破格ともいえる家康の厚遇の背景に、

1600年の家康の戦勝祈願があったと私は考えます。

かつて源頼朝が奥州藤原氏征討を宇都宮大明神に祈願し、そのお礼参りをきちんと果たしたように、家康の場合もまた戦勝祈願成就のお礼として宇都宮大明神の再建を果たしたということになります。そろそろ時間のようなのです。日光に葬られた将軍家康は、もともと宇都宮と深いつながりを持っていて、だからこそ一周忌の後は日光山に小さき堂を建て、われを勧請せよ、関東の鎮守とならんと遺言したというお話でした。それでは時間のようなのですので、これで終わります。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

2025.5.12

天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？

宇都宮短期大学
江田郁夫

はじめに一日光東照宮と徳川家康 (1542 ~ 1616) —

① **天下人家康死す**
・最後の鷹狩中に (1616年1月21日) 田中城 (静岡県藤枝市) で発病⇒1月25日に駿府城 (静岡県静岡市) に戻り、4月17日午前10時ごろ死去 (75歳)

② **家康の遺言⇒本多正純 (のち宇都宮藩主となり、城と城下を拡充する、1565 ~ 1637)・南光坊天海 (? ~ 1643)・金地院崇伝 (1569 ~ 1633)**

・i 御体を久能 (山) へ納め、ii 御葬礼をば増上寺 (東京都港区・浄土宗鎮西派本山) にて申し付け、iii 御位牌をば三河の大樹寺 (愛知県岡崎市、松平氏の菩提寺) に立て、iv 一周忌も過ぎ候ひて以後、日光山に小さき堂をたて勧請 (神仏の霊を移し祀ること) し候へ⇒八州の鎮守 (その土地・住民を災害から守る神、本光国師日記=崇伝の日記) とならん

③ **東照大権現の神号授与 (1617年2月21日) ⇒日光東照社建立 (同年4月) ⇒3代将軍家光 (1604 ~ 51) 家康の21回忌を期して靈廟を新造 (1636年、寛永の大造替) ⇒宮号許可=東照宮 (1645)**

・徳川將軍家が家康の命日を期して日光に参詣 (日光社参) 全19回
・朝廷からの使節 (例幣使) を毎年派遣
・朝鮮通信使や琉球使節も参詣
⇒日光東照宮は日本の総鎮守に ※一時は全国に700社が勧請される

1 家康はなぜ日光に葬られたのか？—東照宮以前の下野国日光山—

① **日光とは**
・日光山=二荒山←補陀落山 (観音の住みか) で南海のななたにあると信じられた山) の転訛
・766年に下野国芳賀郡出身の僧侶勝道が、日光山内に千手観音を祀る四本龍寺 (現輪王寺) を創建⇒782年勝道が二荒山 (黒髪山とも。男体山) に登頂し、中禅寺湖畔に神宮寺 (現中禅寺) を創建

② 神仏習合の霊場

・日光三所権現信仰←熊野三山信仰 (本宮・新宮・那智社)
男体山・女峰山・太郎山=男体権現・女体権現・太郎権現←千手観音・阿弥陀如来・馬頭観音 (本地仏)
・本宮・新宮 (現二荒山神社)・滝尾神社

③ 鎌倉殿・源頼朝 (1147 ~ 99) の崇敬

・父義朝 (1123 ~ 60)、日光山造営の功績によって下野守再任 (1156年)

(1ページ)

・「日光山三昧田」15町を寄進 (1186年)

・勝長寿院 (神奈川県鎌倉市雪ノ下、義朝菩提寺として頼朝が創建) の別当 (事務統括者) が、鎌倉中期以降に日光山別当 (光明院住職) を兼務
⇒鎌倉幕府・室町幕府と日光山との緊密な関係が継続

④ 日光山は「関左の日枝山 (比叡山)」

・比叡山—古くからの山岳信仰の対象。最澄によって天台宗の根本道場となり、延暦寺の勅号
・常行三昧堂—平安初期に仁が中国五台山にならって比叡山に建て、阿弥陀仏を本尊として念仏三昧を修する道場。1145年に日光山にも建立され、以後重要な法会 (修正会・大念仏会) が修された。関東の天台系寺院の中心的存在となる⇒近世には東叡山寛永寺が関東総本山に (住職は天台座主・日光門主をかねる=輪王寺宮門跡)

2 天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？

① **豊臣秀吉 (1537 ~ 98) の天下統一と宇都宮・会津仕置 (1590年)**
小田原城落城 (北条氏滅亡) →鎌倉鶴岡八幡宮参詣→江戸→岩付→結城→宇都宮仕置 (7/26 ~ 8/4) →大田原→白河→長沼→中地→会津仕置 (8/9 ~ 12) →田島→藤原 (鬼怒川) →宇都宮 (8/14 ~ 15) →古河→岩付→府中→小田原
⇒秀吉は宇都宮と会津で関東・東北地方の戦後処理 (仕置) を実施し、天下統一を成し遂げる

② なぜ宇都宮仕置なのか？

⇒宇都宮大明神 (現二荒山神社) への戦勝祈願をおこなった武将たち (宇都宮大明神代々奇瑞之事)
i 藤原秀郷の平将門征討
ii 源義家 (頼朝の先祖) の安倍貞任征討 (前九年合戦)
iii 源頼朝の奥州藤原氏征討 (奥州合戦) ⇒1189年7/25頼朝、宇都宮大明神に奉幣し、戦勝を祈願。10/19祈願成就の報賽として同社に莊園等を寄進する
iv モンゴル征討 (文永・弘安の役)
・宇都宮大明神は日光三所権現のうち、太郎権現 (本地仏馬頭観音) が遷座
⇒宇都宮大明神は日光山の里宮 (別宮)

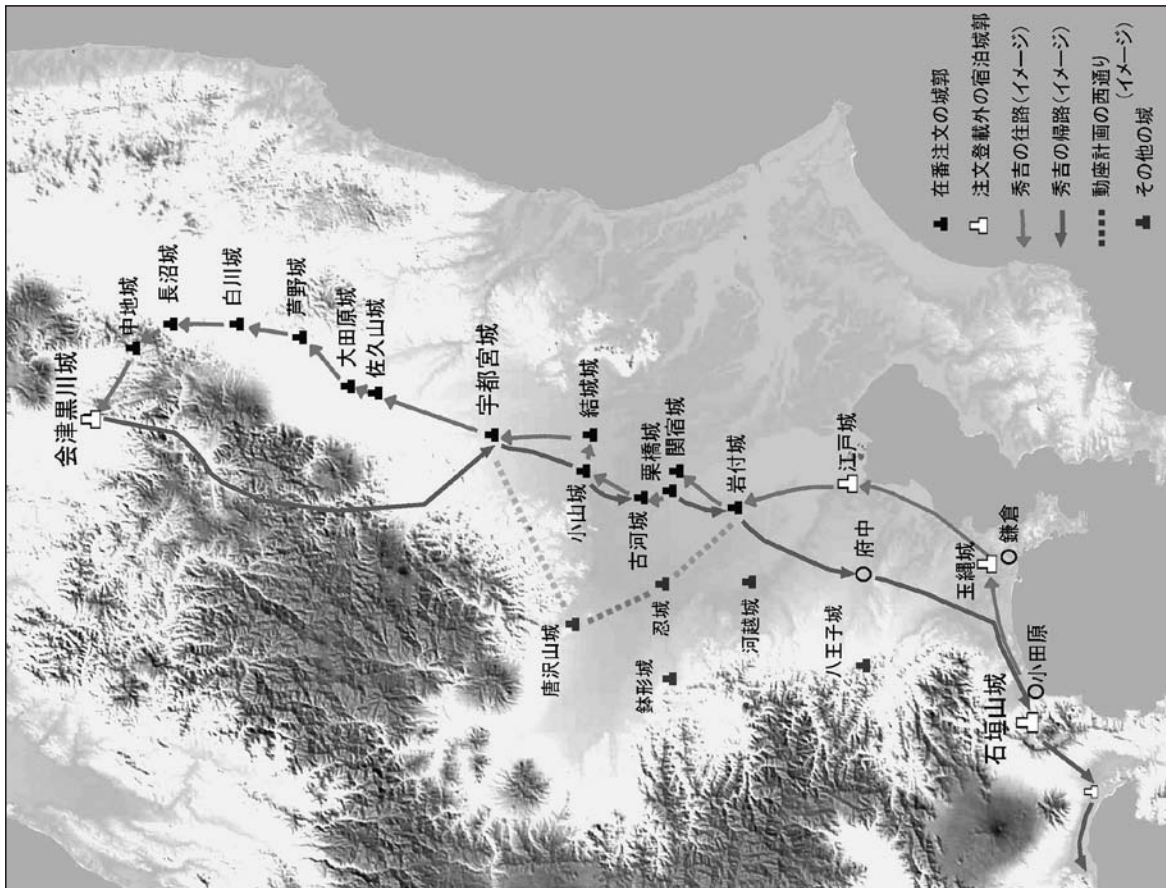
おわりに

① 徳川家康の宇都宮来訪

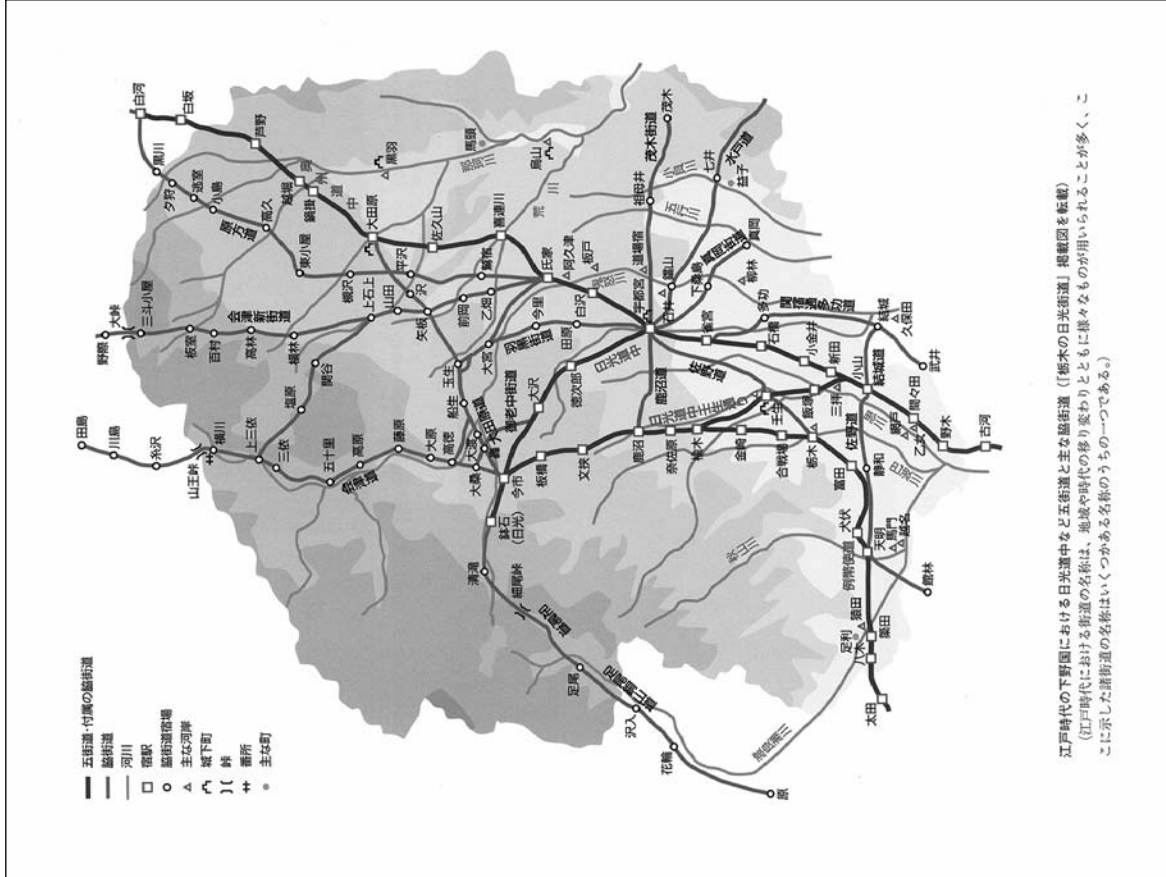
i 1590年7月29日 宇都宮城で豊臣秀吉と会谈⇒江戸に戻る (8/1八朔の打ち入り)
ii 1591年7月下旬・10月下旬 奥羽再仕置のため東北へ出陣し、その往復時に宇都宮に宿泊
iii 1600年7月末~8月初旬 小山で石田三成方との対決のために軍勢の西上を決定 (小山評定)。その後、宇都宮大明神に戦勝を祈願する

② 関ヶ原合戦勝利後、宇都宮大明神の社殿を再建 (1605年7月吉日) =祈願成就の報賽

(2ページ)



(3 ページ)



江戸時代の下野国における日光道中など五街道と主な脇街道（「栃木の日光街道」掲載図を転載）
 (江戸時代における街道の名称は、地域や時代の移り変わりとともに様々なものが用いられることが多く、こ
 こに示した諸街道の名称はいくつかある名称のうちの一つである。)

(4 ページ)

さまです。

宇都宮短期大学人間福祉学科教授江田郁夫先生もコメンテーターとしてお願いします。私は宇都宮共和大学学長、宇都宮まちづくり推進機構理事長、「よみがえれ！宇都宮城」市民の会会長の須賀です。地域の歴史を考え、またそれを後世の子どもたちに伝えることを願っています。

それでは最初に基調講演の感想や、とちぎ SHOGUN 物語の意義について、所感を述べていただければと思います。

■落合氏

ありがとうございます。先ほどの基調講演の前に、少しみんなで前室で打ち合わせのような意見交換をした時に、東京事務所にいるのですが、東京に行ってどのように壬生町を知ってもらったのかと言われた時に、壬生町の場所や何かを話しても、東京は全国から色々な方が集まっているような場所なので、全く分かってもらえません。

たまたまですが、私が東京に行く前に日光の東照宮にお参りに行った時に、二荒山神社でおみくじを引きました。平らという、「平」というおみくじでした。「平というおみくじを引いたことがある人はいますか?」、1人ですね。実は平というおみくじが出る確率はそもそも2%で、神社仏閣にはなかなか入っていないです。たまたま引いた、この話で自己PRをさせてもらって、貴重なおみくじを引くために、ぜひ日光に行ってほしいですと。そして興味があったら壬生に寄ってほしいという話をしてから、このような基調講演の場で壬生町のお話をします。ちなみにですが、平のおみくじの運勢は吉と凶の間ということで、あまりよくないというオチがあります。ネタとしては、全国の人は大体おみくじを引いたことがあるので、話を聞いてもらうためのフックをかけるには、とても良い話です。東京事務所4年間、この話をさせてもらってから、少し壬生に興味を持ってもらって話をしてしています。

説明するのを忘れてしまうところだったのですが、今、手前にかんぴょうの実をお持ちしました。なかなか壬生を知ってもらえないので、栃木県というと、やはりいちごなので、いちごをPRしたいというところではあったのですが、国産の98%以上が栃木県という、断突1位の野菜がかんぴょうです。そのかんぴょうの種を栃木県に持ち込んだのが、壬生のお殿様です。ということで、かんぴょう巻きを配ったり、かんぴょうの説明をしたりしながら、少し胃袋もつかむというような仕事をしています。

今日の講演を聞かせてもらった感想ですが、本当に日光街道や例幣使街道、日光道中、壬生通りがあったりなど、非常に日光と東京には関係があります。さらに今回LRTがいよいよ西側に延伸されるということで、新たな交通環境が整います。昔の水運から今の陸運に変わった時に、いろいろな文化や人の流れが変わったところがあるので、今回こういった機会は、非常にチャンスだと思って、圏央まちづくり協議会さんのこのような講演に参加したところがあります。今日は壬生しか参加していませんが、ぜひこの熱量を高めて取り組みを盛り上げて行ければと思っています。

■須賀

SHOGUN 物語のパフレットにも、これはかんぴょうですね。

■落合氏

そうです。いちごと並んで隣にかんぴょうの畑が出ています。見逃さないでぜひ見てください。かんぴょうは、断突1位です。

■須賀

ビジネスのコンベンションにも、こういった歴史を活かして、いかにお客さまをまた市内に、あるいは日光や周辺の観光地に呼び込むかが、これからの課題かと思います。

■鈴木氏

ありがとうございます。まず今日の先ほどの江田先生のお話をお聞きした感想から申し上げます。我々はこの二荒山神社はかなりすごいと、昔からやはり武将の方が戦勝祈願に來られていたと、うすうすは聞いていましたが、今日あらためて、さらに本当にビッグネームのスーパースターの武将たちに聖地として崇められていたと知りました。やはりこれは観光もそうですし、今力を入れている MICE は、ここでもやはり使わない手はないと考えています。ですがやはり先ほど聞いた感じだと、難しくてなかなか腑に落ちないというか、非常にそれが最初の感想です。

ここをいかに、例えば小学生でも分かるように、あるいは、この二荒山がどれだけすごいかをいかに分かりやすく伝えられるかです。その辺ができると、より国内の観光客、さらにインバウンド観光客の呼び込みにもつながっていくのかなという感じで、お話を聞きました。

それからこちらの SHOGUN 物語の意義に関する考えですが、こちらの SHOGUN 物語は、やはりこの歴史街道を基軸にして地域間や自治体間で連携しながら、それぞれの地域資源を活かして交流人口をまず呼び込みます。それによって地域活性化、地域経済の活性化を行っていくということです。

これからの時代は、やはりこの連携や共創がキーワードになってくると思います。その意味で、この徳川時代にフォーカスした歴史街道の物語を再興しようというのは、観光的な視点で見ると、いわゆる江戸——東京から、ずっと富士山を通過して名古屋、京都、大阪というゴールデンルートがありますが、またそれとは違った、何か新たな誘客ルートになっていく可能性を秘めているのではないかと思います。そのためには、やはりこの各街道沿いの地域が、同じ思い、熱量でしっかりと取り組んでいくことと、まだまだ多分我々が知らない、新たな発見や発掘ができそうな感じがするので、そういったところをしっかりと磨き上げていくことが非常に重要かと思います。

多分そのようなことを、各地域、各自治体に行っていただきつつ、点ができればそれを結んで線にして、さらに面にしていきます。そうすると非常に魅力のあるエリア、あるいは軸になっていくでしょう。逆にこういったことを行うことで、さらなる交流人口の増加につながるのかなという感じで聞いていました。

■須賀

江田先生は市民の会の理事でもあります。二荒山神社と宇都宮城の関係についてご説明をいただけますか。

■江田氏

そもそも宇都宮とは何かということかと思います。宇都宮はもともと神社の名前なのですが、東北地方に向かう時に必ず通るルート上にあるので、門前町であり、かつ宿場町にもなっています。その宇都宮という地域を、平安時代から江戸時代になるまでの約400年間治めたのは、藤原摂関家の末裔を称する武士で、それが宇都宮氏を名乗っています。つまり、宇都宮大明神の神官と武士を兼ねたわけです。

宇都宮城に行かれた方は分かると思いますが、かつて宇都宮大明神と呼ばれていた現在の二荒山神社は、丘陵の一番端にあります。そこから南に真っすぐ下っていった丘陵の先端部分に、宇都宮城があります。最終的に江戸時代になると、神社と城はセットとして機能しなくなりますが、それ以前は宇都宮城の城主は宇都宮大明神の神官でもあったので、二荒山神社と宇都宮城の本丸を結んだ現在の「みはし通り」が、両者を結びつける重要な交通路として約400年間機能していたことになります。

■須賀

馬場さんは東京にもおられましたか、東京から見た宇都宮の感想があればお願いします。

■馬場氏

あらためて、宇都宮市総合政策部の馬場です。3月まで虎ノ門にある東京オフィスに勤めており、4月から現職です。

今日の感想は、キーワードとしては、徳川幕府という歴史軸をストーリーとして横展開していくところが、やはり今後の可能性を秘めていると思います。自治体はやはり横の連携が結構苦手です。例えば歴史のことを考えてみると、多分宇都宮城と言った時に、初代の藤原宗円からどんどん宇都宮氏をたどって行って、その後、先ほど江田先生からあったような浅野長政などのほうに行って、最後の47代の戸田忠友に行ったりということで、結構下に掘っていくことは得意です。ですがそれを横にどのようにつなげて、観光などにつなげていくかは、やはり少し苦手です。そのアイデアとして、この徳川幕府や徳川家康、日光をフックにするのは、面白いと思って伺っていました。

つないでいく時に、やはり重要になるのは、日光、日光東照宮になると思いますが、先ほどあったインバウンドという視点で見ると、私がユネスコ世界遺産のホームページを英語で見た時に、徳川という言葉は2回しか出てきません。外国人から見ると、多分日光や日光東照宮は自然——nature や、やはり宗教——religious、神道、仏教という形での神秘性——spiritual というような言葉が、ユネスコのホームページには出ています。

鈴木常務からあったように、どのように分かりやすく伝えていくかという中では、インバウンドには、今のところ徳川幕府、徳川家康については、なかなかイコール日光、日光東照宮には至っていません。その認知度を高めてどのようにこれを横展開していくかは、今後の可能性でもありますし、チャレンジだとも思って聞いていました。

せっかくこのような江戸、宇都宮、日光、そして壬生や鹿沼など、いろいろなところがあると思いますが、それを横でどのように結んでいくかを、今回キックオフということなので、皆さんで知恵を出して考えていって、先ほどの、点を線にして面にしていくことができたらと思って、聞いていました。

■須賀

では、具体的に協議会として何を行っていけばいいかということで、一つはとちぎ SHOGUN 物語歴史街道観光周遊マップについて、国内向け、インバウンド向けに、ホームページや SNS で発信を行いたいという話が見さんからありました。こういった街道沿いの自治体と連携して、観光コンベンションや、広域で連携したイベントを行っていくということです。

とちぎ SHOGUN 物語について、歴史的な調査研究を、もっと子どもたちにも分かりやすく発信していけば良いのではないかと、統一のロゴを作ったら良いのではないかと。このようなことについてパネラーの方からもご意見を頂きたいです。まず藤栄さんから、今日は資料の提供もいただいているので、壬生で今までどのような取り組みをされているのか、ご紹介いただけますか。

■藤栄氏

壬生町をご存じの方、壬生町からどのようなことを思い浮かべるかを想像していただきたいです。最近だと、コストコや獨協大学、おもちゃの町だったり、北関東の自動車道を挟んで北側のエリアをイメージされる方が多いですが、それよりも南側、旧壬生城下の町には、とても古い重みのある歴史が残っていると感じています。

本日お配りした壬生の歩みと文化、この年表の裏面に、壬生町に関係する郷土の偉人をご紹介します。日光との関連が深い方々もいっぱいおり、壬生と日光のつながりで言うと、日光東照社を造営するに当たって、その時の副総督、副監督を務めたのが壬生の当時のお殿様、日根野氏です。また日光社参の際、将軍がお泊まりになるお城が壬生城であったということで、壬生も宇都宮市さんに負けなくらい、日光とのつながりがあるのではないかと考えています。ただ一方で、こうした壬生の魅力的な歴史を、町民の方、また町外の方がどれくらいご存じかという、少し不安な面もあります。

歴史民俗資料館、歴史の面で言うと、この郷土の偉人顕彰事業として、年に1回壬生の偉人をテーマにした企画展を開催しています。こちらの実行委員会には町の内部だけではなく、町民の方と一緒に、このような方がいるのでどのようにPRしたらいいかを考えながら毎年行っています。

本日の江田先生の講演にもあったとおり、歴史は単発ではなく、家康の前から日光との関わり

があったように、壬生町の歴史も町の中だけで留めておくのではなく、近隣の市町さんなどと共有しながらどのように発信していくかが、今の課題ではないかと感じています。

■須賀

壬生町ではお殿様料理やお姫様料理を作っていましたよね。落合さんもいいですか。

■落合氏

壬生町で私は数年前まで観光を担当していました。壬生町に観光に来てもらっても、壬生には歴史があるのになかなか知ってもらえませんでした。やはり伝える人を増やさなければということで、壬生町の観光ボランティアを立ち上げました。30人ほどで、町内の観光案内を行ったところ、年間で1,000人が壬生に来るようになりました。来た方の大体3割から4割は、意外なことにも、町内の方でした。町民の方も壬生の歴史を知らなくて、知ってもらったことによって、いろいろな発展というか、壬生への気付きというか、やはり住んでよかったという誇りが得られたということがありました。

また、1,000人ぐらい来るようになって、経済的なことを言うと、何とかして地元にお金を落としてほしいという考えがあり、その時に何か名物料理を作れないかというところで、資料館に行ったら、壬生城のお殿様が1カ月間食べていた食の料理帳が見つかりました。ではその料理帳に基づき再現しようと始まったのが、壬生お殿様料理プロジェクトです。

壬生お殿様料理プロジェクトも、江戸時代の当時の料理をそのまま再現すると、見つかった料理帳が平日の料理だったので、非常に質素なものに仕上がってしまいます。観光的に、現代風に、そして、今、来るお客さまをお殿様に見立てて作ろうと始まったのが壬生お殿様料理です。各店舗でいろいろなアイデアを出して競っていただいたところが良かったと思います。

壬生のお殿様料理の最初は、和食店だけが参加したのですが、どうしても和食店だけだと、だんだん広がりも狭くなってしまうので、その2年後ぐらいですが、壬生お殿様フレンチということで、フランス料理屋さんが入っていただきました。次の展開としては、女性向けに、ヘルシーだったり、地元の食材をふんだんに使って、壬生お姫様料理というものを今展開しています。次は壬生若ちゃま料理なんていうアイデアもあり、やはり料理店さんも楽しんで参加するというか、あそこがこうしたら自分はこうするというような仕掛けが、非常にうまくいったように思います。テレビなどのメディアにも取材していただきました。壬生のお殿様料理を食べてから日光に行くようなツアーも来ているので、そういったところを今度のLRTなどと連携をしながらいいですか。広がりというか、今までだったら、餃子を食べたらそのまま新幹線に乗って帰ったかもしれませんが、東武線に乗って壬生に来て、おもちゃ博物館に行こうかなど、今までにない組み合わせができれば良いと思います。お殿様料理からの発展ですが、そのような気持ちがあります。

■須賀

本校調理科でも、数年前から吉宗公辯當^{べんとう}をフタバ食品さんに作っていただいています。東照宮

文書の中には、吉宗が日光社参の時に宇都宮城に来てどのような料理を召し上がったかという、材料と料理が書いてあります。レシピは分かりません。どのように作ったか分からないし、味の素もコショウもないのですが、何ととっても高校生たちがそのようなものに興味を持ってくれたことはよかったと思います。

このようなことをどのようにPRして、若い人たち、あるいは他の世代にも関心を持ってもらうかという観点ではいかがですか。

■江田氏

昨今、お城ブームという言葉をよく聞くようになったと思いますし、また街道歩きもなかなかの人気とお聞きします。街道歩きの関連本もいろいろな出版社から刊行されています。それらと食を組み合わせるとするのは、実際に私が体験するとしても楽しいのかなという気がしています。やはり現地に行って歩いてみる、見てみると、新たな発見もあろうかと思しますので、それにいろいろなプラスアルファがあるとさらに喜んでもらえるのかなと思います。着付けや、その写真を撮るとするのも京都や金沢などの観光地では人気のようなので、そのようなプラスアルファを宇都宮でどう加味していくかが重要なポイントかなと思いました。

■須賀

鈴木常務、何かアドバイスはありますか。

■鈴木氏

我々観光コンベンションとしても、やはりいかに宇都宮に来ていただいて、楽しんでもらえるか、あるいは長時間滞在していただけるか、そのようなところで、いろいろな試行錯誤をしているところです。このSHOGUN 物語の目的、インバウンドを含めて、そういった方々にどんどん宇都宮や栃木に来ていただくということだと思います。

インバウンドでお話しします。まず宇都宮のインバウンドの現状です。これは2023年度のデータになりますが、おでかけウォッチャーという、GPSでデータが取れるものがあります。そちらのデータだと、宇都宮市には21万人の外国の方がみえています。トップ5はやはり韓国、台湾、アメリカ、タイ、スペインです。行き先として宇都宮駅周辺が多いことと、ほとんどが駅を出て周遊をしていない現状があります。令和元年度に周遊分析調査を市で行っていますが、訪日、いわゆるインバウンドのうち、75.4%が宇都宮以外に通過をしまっている状況がありました。かろうじて、残りの24.6%は駅に滞在しているのですが、駅からほとんど外に出ていない状況でした。

これは何とかしないといけないということで、昨年度から宇都宮の、餃子、カクテルや日本酒などを駅の改札の中で味わっていただきながら、外でジャズを演奏して、改札の外に出ていただけるようなことを、試行錯誤しました。アンケートも取りました。ですがやはり、インバウンドのお客さんは目的を持って東京から来ているので、途中で改札を出ることはなかなか難しいです。

旅前にいかに宇都宮や栃木県の情報を提供できるかが、インバウンド、観光客が増えていくキーになるかと思います。

特にインバウンド関係は、ジャパンプランド調査や県の調査を見ると、食、グルメへの関心、期待が最も高くなっています。やはり日本国内の旅先選びの上位には食が入っています。県のインバウンド調査でも、宇都宮の餃子への関心は上位にあります。この食と体験、やはり食をいかに使うかが、呼び込む一つのキーになるかなということです。

先ほど餃子会の鈴木さんの話もありましたが、鈴木さんやJ Rの方、若山さん、あるいは外国の方も含めてワークショップなどを行いながら、インバウンド戦略もまとめているところです。

まず宇都宮を知ってもらうことは大切です。外国の方も餃子は知っていて、食べたいという方が多いです。ただし宇都宮が餃子の町というのは、ほとんどの方が残念ながら知らない状況なので、餃子をフックにまずは宇都宮を知ってもらって、そして来てもらいながら、宇都宮に来るとその他にもいろいろな地域資源があることに気付いてもらう、体験してもらう形で進めていけると良いのかなと考えています。

それから MICE です。特に MICE でも、外国の方にはかなり来ていただいております。令和6年度は350人超の外国の方が MICE で宇都宮に訪れています。この MICE に来る外国の方も重要なターゲットと考えています。この MICE の空き時間やアフター MICE の時間に、いかに楽しんでいただけるかということで、飲食関係の情報や観光の情報をいかに提供できるか、仕組みづくりをいろいろ検討しているところです。

■須賀

ライトキューブで国際的な会議などがあった後に、篠原家住宅でお茶ができるような体験型で、しかも歴史を感じられるような。ライトキューブの会議室の中では駄目で、しつらえも必要です。馬場さんは東京におられて、外国人の栃木県に関する関心をどのように捉えていますか。

■馬場氏

とちぎ SHOGUN 物語ということで、観光という視点から見て、徳川幕府や将軍や世界遺産に目を当てた時に、目的地が先に決まっていますと。日本に日本遺産は26あります。

そのうち、東京周辺の世界遺産は幾つあるかということ、四つです。その四つがどこかということ、富士山はもう日本のシンボルですから当然ですが、他に日光東照宮と、ル・コルビジェの西洋建築と、富岡製糸場です。外国の方にとって、東京から交通の便が良く、歴史の古い世界遺産は日光しかないと思います。

では、徳川とつながっている世界遺産には何があるかと考えると、日光東照宮と、京都の二条城だけです。徳川でつながってくる単独の世界遺産は、26ある中でもこの一つだけです。これは強みかと思っています。二つ目は、この徳川幕府や徳川を英語で調べてみると、出てくるものは駿府城すんぶや二条城、岡崎城など。これらと日光を線や面で結んでいくところは、一つの強みになると思うので、これをどう活かしていくかが二つ目のチャレンジかと思っています。

三つ目は、圏央まちづくり協議会の会員さんにはグローバルな企業がたくさんいらっしゃるということは、海外にも工場や支社をお持ちだったり、また、海外から従業員の方が来られることも多いかと思います。そのような方を対象に、今後、英語のパンフレットを作られるということですが、ご協力いただいて配布したり、また、あまり日本ではインセンティブ旅行はありませんが、海外、東南アジアだとあるかと思います。グローバル企業のインセンティブ旅行に、このSHOGUN 物語を掛け合わせてもらうところにポテンシャルがあるかと感じました。

■須賀

フロアからもご意見を頂ければと思います。県立博物館の琴寄館長がいらしているので一言お願いします。

■琴寄氏

全体の感想をお話しします。江田先生のように、きちんと県内の歴史を分かって、それをひも解いてお話をしてくれる人はすごく大切だと、あらためて感じました。とちぎSHOGUN 物語の資料の中に、写真がいくつも載っているのですが、博物館蔵ということで、私は博物館にいるのに見たことがないものもあります。普段から展示しているものではなく、収蔵してあって、企画展の時に見せるものが結構あるので、やはり博物館や資料館でどのような資料を持っているか、それをどう活用していくかも、つながってくると思います。

馬場さんから、自治体は横の連携がなかなか不得手ということがありましたが、博物館も文化や歴史のお話で展開するだけでなく、今日のような観光や、壬生町は医療や薬なども持っていると思います。また観光を含め、福祉や他の産業など、さまざまな分野と歴史的なことをうまくつなげられると良いと思いました。

■須賀

マスコミから、ヤマゼンコミュニケーションズの野沢さん。

■野沢氏

栃ナビ！を運営しています。口コミサイトを運営している者として意見を述べます。

須賀先生がおっしゃった、高校生に吉宗辯當を作らせるというのは、もう自分ごとでしょう。きっとその高校生はいろいろ歴史を勉強したことと思います。関心も非常に高まったことでしょう。落合さんがおっしゃった、ボランティアの約1,000人のうち、町民が3～4割いらしたというお話もヒントかと思います。

やはり情報発信とはコストと比例するものです。情報発信をしたところで、それが文化として根付くか、評価されるかというとなかなか難しいと思います。やはり身近なところから、我々がみんなで体験して、愛して、それをムーブメントにしていこうという取り組みこそが、遠回りのような気はするけれども、実は一番近道ではないかと思います。

よくお話しするのは宇都宮カクテルです。息子や娘が20歳になったならば、お父さんがカクテルバーに連れて行って、最初のお酒デビューをさせるというのはどうでしょう。東京のテレビ局が、宇都宮にはそのような文化があるのですねと取材に来るくらい、徹底してそれをやります。実は自分の娘が20歳になった時に、それを実践して連れて行ってみたんです。思い出になったと思います。なかなか自前で若い人同士でカクテルバーというのは、敷居が高いでしょう。ですがそれを若いうちに1回体験させてあげる、そのような文化をつくってそれを広めます。これは一案です。

我々自身の体験をもって文化を定着させていく、広めていくということです。素晴らしいものがたくさんあります。インバウンドとなれば少し道のりはあろうかと思うけれども、その延長線上で道筋はあると思います。

■須賀

これからとちぎ SHOGUN 物語で、ロゴだけではなくてお土産になるようなもの、グッズなど、いろいろ作っていきたいと思うので、東武百貨店の社長だった佐瀬さんから、商品開発について。

■佐瀬氏

私も長年宇都宮に住んでいて、二荒山神社と日光の二荒山神社の関係は曖昧で、よく分かりませんでした。

このような話を、お子さんからお年寄りまで含めて、どこかで系統的に勉強できる場がこの街にあったら良いなと感じました。興味の度合いで、そこへ訪れる方はさまざまかと思います。ここに住んでいらっしゃる方もそうですし、来街者の方もそうだと思いますが、このような勉強ができる場をつくるのが大切ではないかと思いました。

それと、壬生町の年表を含めて、素晴らしい資料を今日見せていただきました。こういった発掘を宇都宮市ももっとしていくと、勉強の場、それから観光の目的としても役に立つかと思いました。太田胃散の製薬者が壬生町出身の方だと初めて知りました。

■須賀

宇都宮市の子ども科学館、壬生町のおもちゃミュージアムなどが連携を取って、この SHOGUN 物語の歴史街道の歴史を楽しく学ばせたり、興味関心を持たせるようなアイデアがあればお願いします。

■藤栄氏

資料館としても、お子さまに歴史を身近に感じていただけることは、うれしいことです。例えば夏に管内の小学生を古墳へ案内して、この古墳がなぜ壬生にあったのか、古墳ボランティアの方が小学生に説明する機会を設けました。また、論語教育を進めていて、町内の小学生から中学生まで、義務教育のうちに100編の中から18編を町で指定して、卒業までに暗唱できるように

教育委員会で進めています。

何でこのような教育を受けているのだろう、そこから深く入っていったら、壬生町にはこのような歴史があるから、自分たちはこのような勉強ができていますと。地元の歴史に、教育からお子さんを通してつなげて行っていただくと、資料館もうれしいです。

■須賀

登壇していただいた皆さま方から一言ずつ、圏央まちづくり協議会のとちぎ SHOGUN 物語に対する期待や要望、また本日の全体の感想など、自由にいただければと思います。

■江田氏

私は宇都宮育ちで、いわゆる「宮っ子」です。二条町という、かつての城下町の家臣団住宅地である一条、二条、三条、京都だと四^{しじょう}条ですが、宇都宮では四^{よじょう}条と言います。その二条町、現西一丁目育ちなので、ホームタウンという意識があります。

ホームタウンの伝統と誇りというか、そもそも宇都宮とは何なのでしょう。一^{いちのみや}宮という地名は全国各地にあります。宇都宮はなぜ一宮ではなくて、宇都宮なのか、興味があります。愛着や興味関心がもてるかどうかは、大切なことではないかと思っています。

ご意見をいろいろお聞きして、熱量というご指摘もそうだと思います。生まれ育った人たちが自分の町にプライドを持てるかどうかはとても大切なことだと思います。これからもそれらの点を大事にしていきたいです。

■落合氏

とちぎ SHOGUN 物語という名前は素晴らしいし、名前負けしないのかな、とも思いますが、聞いて言い続けているうちになじんでくることもあります。とにかく参加して、興味が出たら、そこに行く。今日、話を聞いたら、壬生に行ってみようかな、壬生の観光ボランティアに話を聞いてみようかな、宇都宮に行って、少し歩いてみようかな、餃子を食べながらどこかで写真を撮ってこようかなというふうに、まず動きだすことが大切だと思います。

圏央まちづくり協議会に参加されている企業の皆さんは、その企業自体がブランドなので、そのような方たちが本気になって動くことが、人を巻き込んでいくのかなと思います。

私も観光担当の際に、フィルムコミッションとあって、撮影誘致をさせていただきました。県からこのような撮影があるのですが、どこか良い場所はないかということで、3年間、毎回、手を挙げたのですが、1回も採択されなくて、初めて決まったのがNHKの大河でした。それだけ手を挙げて、頑張っているんだからと、仕方がないから壬生でやろうかという流れがありました(笑)。

撮影ロケ地が決まって、夏に見に来た時に、草が生えてしまっていて、これでは撮影ができないと言われたのですが、親しくしてくださった制作の方が町内を巡ってくれて、ロケ撮影のできる場所を探してくれて、撮影できました。

SHOGUN 物語を上手くいくためには、とにかく熱量を上げて、参加している人たちが、SHOGUN 物語をとにかく面白くしよう、話を聞いて興味があったところに行ってみようということが良いのかなと思います。

宇都宮の歴史は、自分が実際に行ってみて思うことや感じることもありますし、そこに行っておいしいものも食べたいなと思いましたので、動こうかと思っています。

■鈴木氏

SHOGUN 物語のペーパーの真ん中に、具体的な施策等がいろいろ入っています。より魅力をアップしていくためには、ハードとソフトのバランスの取れた整備が必要かと思っています。インバウンド関係では、食や日本文化の体験のキーワードは外せないと思います。ぜひしっかり意識をしながらやっていくと良いかと思っています。

体験では、宇都宮城もあり、御橋通りなども整備するのであれば、時代劇ふうなコスプレをしながら闊歩できるようなことも必要でしょう。夜は、ジャズカクテルのクルージングツアーもありますが、ディープな泉町や江野町など、昔ながらのスナックなどの古きよき場所を巡るような旅もできると良いかと思っています。

個人的にすごくやりたいのですが、御橋通りの東側の、昔の御橋通りから今小路^{いまこうじ}までの間に、昭和 30 年代には、仲見世から移ってきた飲食店がいっぱいありました。そういったところがまた復活すると、インバウンドだけではなくて、旅行者にとっても面白いかと思っています。

やはり食です。餃子もそうですが、宇都宮は、観光動態調査でも、市内の飲食店全般の味やジャンルの豊富さについては評価を受けています。これをうまく使っていくと、さらに魅力の味付けになっていくかと思っています。

そのためには、連携や共創がキーワードになってくると思います。同じような熱量、熱意を持って取り組んでいけば、SHOGUN 物語も新たな価値や魅力を生み出す原動力、エンジンになっていくかと思っています。

■馬場氏

歴史について言うと、宇都宮では小中学校で宇都宮学を 10 年以上前から行っていて、お子さんは宇都宮の由来や歴史を知っています。知らないのが、私たちのような 40、50 代かと思っています。宇都宮学は非常に勉強になりますので、ぜひその大人の方にも普及させていかなければと感じたところでは。

このとちぎ SHOGUN 物語をどのように広げていくか、行政だけでは限界があります。圏央まちづくり協議会のいろいろな企業が共創で行っていくことかなと思います。

スピードや、トライ・アンド・エラー、取りあえずまずはやってみて、そこから新しいものを見つけて次につなげていく行動力とスピードが、SHOGUN 物語を広げていくために重要なことであらためて感じたところでは。

■藤栄氏

この会に参加して、横のつながりを大切にして郷土の歴史を発信していく大切さを学びました。あらためて資料館、博物館の役割を考えると、こういった観光のチャンスを頂いた時に、その資源となる歴史の調査研究をしっかりと、広く地元の人やお子さまに教育、普及を徹底していくという、日頃からの活動があらためて大切だと感じました。資料館としても、壬生町という郷土の偉人をもっと発掘できるように仕事にまい進していきたいと感じました。

■須賀

今日は宇都宮市と壬生町の方でしたが、このリーフレットにある小山から始まって、東武沿線、JR沿線、鹿沼などの自治体も含めて地域が連携して、とちぎSHOGUN物語を盛り上げていければと思います。

今日のサブテーマは、LRT西側延伸で新たな価値あるまちづくりということで、観光振興をするためにも足が必要です。交通事業者の力も得て、LRTの東西基幹公共交通機関の整備も含めて、交通整備をぜひ発展させる。地域全体が元気になって、栃木の歴史を知って、誇りにしてもらえば良いなと思います。

LRTは、さらに東西基幹公共交通機関として機能すべきだと思います。私鉄のビジネスモデルは、阪急の小林^{いちぞう}一三以来、国鉄と国鉄の駅を結ぶものだと思っています。大阪の梅田から宝塚を結んで、片側がターミナル、デパートで、宝塚歌劇があって、遊園地があって動物園があるということで、その沿線を開発していくということです。

大谷と芳賀を結ぶだけではなくて、将来的には真岡^{もおか}鉄道、鹿沼を結んで、JR日光線もLRT化すれば、それぞれの地域に歩いて楽しい町ができます。これは五島慶太も、堤さんも、根津さんも同じ考え方だったと思います。

中尾常務が宇都宮を去ってしまうのは大変寂しいけれども、ぜひ中尾常務がつくられたともしびを、さらに燃え盛るようにして、栃木県内の交通ネットワークがより発展していくことが、地域の活性化にもつながるのではないかと思います。素晴らしいお話をいただいたパネラーや、基調講演をいただいた先生方にあらためて感謝を申し上げます。大きな拍手をお送りください。(拍手)

■進行

それでは当協議会代表の古池より、皆さまにお礼のあいさつをさせていただきます。

■古池

とちぎ圏央まちづくり協議会を代表して、まず皆さまに御礼を申し上げます。本日は多くの方々にご参加いただきましてどうもありがとうございました。ここにお集まりの皆さま方の中にはとちぎ圏央まちづくり協議会とは何なのかということを余りご存じない方もいらっしゃるのではないかと思います。とちぎ圏央まちづくり協議会は民間企業の交流連携を目的とする団体です。7

年前に LRT が東側にできることになった時に、その沿線にある企業を中心に LRT の活用を推進していこうという目的で作られました。始めた時には会員企業は 50 社でしたが、今は 120 社を超える規模になっています。本日の企画書にも書いてありますが、地域における企業の役割は重要だと思っています。多くの会員企業の皆さまと、行政や市民の皆さまと横のつながりをさらに進めていって、栃木のまちづくりを推進していきたいと思っておりますので、ぜひご支援をよろしくお願いいたします。

さて、これから LRT が西側に延伸します。これも長年の宇都宮市民の悲願だった J R 宇都宮駅と東武宇都宮線を LRT でつなぐというものです。

一つ気がかりなことがあります。幸いにして東側は工業団地への通勤、あるいは沿線の大学や高校への通学によって LRT の利用者が増えていますが、西側に延ばした時に本当に乗ってくれるのかということです。私が宇都宮に来て 40 年になりますが、昔の宇都宮は都心部がとてものにぎやかでした。オリオン通りの中心部辺りには、デパートが五つあった時代がありました。それがその後どんどん空洞化してしまって、シャッター通りになってしまいました。それをまた活性化するという意味での LRT の西側への延伸は大事だと思います。

そのためには、もっと魅力のある街にしていかなければならないと常に思っています。ホンダヒートというラグビーのプロチームが来年から宇都宮に来ますし、スポーツによるまちづくりも盛んに進めていきたいと思っています。

もう一つは歴史です。歴史や文化は非常に大事だと思います。江田先生からお聞きしたことは、良い勉強になりました。私が見ている限りでは、宇都宮はあまり歴史を重視してこなかった街ではないかと思っています。宇都宮は戊辰戦争と太平洋戦争時の空襲で灰燼に帰しました。そのような負の歴史の中で、これまで歴史とそれに伴う文化が継承されてこなかったのではないか。これから宇都宮が誇れる街として世の中から認められるためには、古くからあるものをうまく活用して、シビックプライドといいます。市民が自分の町に誇りを持つことが大事だと思っています。

私自身も宇都宮市と共に都市ブランドの推進に取り組んできました。私が胸に付けているバッジには、「住めば愉快だ宇都宮」とあります。このロゴによる宇都宮の P R は 10 年以上前に市と一緒に始めました。「○○○愉快だ宇都宮」というロゴが今や 1,500 以上市役所に登録されています。宇都宮の知名度も、LRT の成功を契機としてどんどん上がっていきつつあります。宇都宮が本当の意味で住めば愉快な街になっていくことが重要であると思います。とちぎ SHOGUN 物語などを進めていくことによって、ますます街の活性化が進むことを期待しています。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)